
日本における映画英語教育の流れ②

－ 1980年代の流れ－

広島文教女子大学 角山 照彦

1. はじめに

角山(2004)では、日本における映画英語教育の流れのうち、特に1980年以前の流れに焦点を当てて概観した。その結果、一般英語学習者にとっては、映画は戦後早い時期から英語学習の教材として注目されていたが、英語教育の場では、なかなか商業映画を授業に活用するという発想は出てこなかったようであり、この時期にはまだ映画英語教育は始まったとはなかなか言えない状況であることが分かった。しかし、同時に、授業における映画の活用自体は、当初語学教育用映画に限られていたものが、文化や風土を紹介した資料映画も活用され始めるなど、少しずつではあるが裾野が広がってきたことも明らかとなった。本稿では、引き続き、1980年代の動きについてまとめてゆく。

2. 1980年代前半

1980年代に入ると、まず、1981年にパイオニアがレーザーディスクプレーヤーの発売を開始した。また、ビデオデッキの普及も徐々に進んでいった。このように、ハードの普及が進むにつれ、状況にも少しずつ変化が見られるようになった。

長谷川(1981)は、映画『市民ケーン』(*Citizen Kane*)をアメリカ新聞界の内幕を学生に伝えるのに適した教材として挙げながら、教材としての商業映画の活用を提唱している。主要英語教育雑誌で商業映画の活用が提唱されたのは、恐らくこれが初めてであろう。しかしながら、これは授業実践の報告ではなく、あくまでも活用の可能性を述べていると捉えた方がよい。実践報告の中心となっているのは、依然として教育用映画である。

ただし、長谷川は、映画に関して、「異なった階級レベルの英語、慣用的な表現、俗語、特定の職業・グループの特殊用語、通語、隠語などが含まれており、まさに英語表現の宝庫といえよう」(p. 9)と述べており、すでに映画の持つ大きな可能性に着目している。さらに、映画においては、必ず発話における状況が設定されており、日本にいながら言語使用のさまざまな場面が疑似体験出来るとも述べている。また、映画は「英語表現だけでなく、英米の社会文化背景を教える面でも適している」と、異文化理解への映画活用の視点にも触れている。

その後、映画そのものを活用した実践報告が登場してくる。

まず、日比野(1983)は、authenticな英語を学ぶためにバイリンガル映画とコマーシャルの活用を提唱している。日比野はバイリンガル映画という言葉を使っているが、実際授業で使用された教材としては、『大陸横断超特急』(*Silver Streak*)という1976年の映画の他は、『刑事コロンボ』、『奥様は魔女』など、二ヶ国語放送されたテレビドラマが中心となっている。また、この実践報告からは、今では当たり前となった「authenticな英語」という用語が当時やっと注目されるようになってきたことがわかる。映画の活用は、ハード面での普及もさることながら、authenticな英語への関心の高まりとも密接に関連していると言えよう。

続く高山(1986)は、東京大学における1984年からの実践報告であるが、従来の教材の弊害を述べると共に、『カサブランカ』(*Casablanca*)と『卒業』(*The Graduate*)のシナリオから抜粋した表現を例にとりながら、映画利用の教育的効果について次の4つの視点から述べている。

- ①幅広い人間像と経験の提示
- ②興味ある一貫した文脈の利用
- ③音声・映像の意味の理解への貢献
- ④実際の会話とその特徴の提示

実際の授業形態としては、映画(シナリオと映画ビデオ)を用いた訳読と文法説明が中心であり、リスニング、スピーキングへの活用や異文化理解への活用については、活用可能性について言及しているだけである。

また、当時同大学で実際に使用された映画として次の13の映画を挙げている。

『青春の輝き』(*Splendor in the Grass*)、『ローマの休日』(*Roman Holiday*)、『ダイヤルMを回せ』(*Dial M for Murder*)、『そして誰もいなくなった』(*Ten Little Indians*)、『ピクニック』(*Picnic*)、『わが命つきるとも』(*A Man for All Seasons*)、『エデンの東』(*East of Eden*)、『おかしなホテル』(*Plaza Suite*)、『年上の女』(*Room at the Top*)、『怒りを込めて振り返れ』(*Look Back in Anger*)、『お熱いのがお好き』(*Some Like It Hot*)、『カサブランカ』、『大草原の小さな家』(*Little House on the Prairie*)

最後の『大草原の小さな家』は、実際には映画ではなく、テレビドラマである。日比野(1983)同様、この時期には映画とテレビドラマが混同されることも多かったが、80年代前半に大学で実際に使用された映画を知る上では貴重である。その活用法も聴解に重点を置くものから、シナリオを読んで最後に映画を見せるもの、文化・社会の背景を説明するものまで幅広い。

80年代前半と言えば、筆者自身大学にて実際に英語教育を受けたわけだが、ある授業で映画『第三の男』(*The Third Man*)が使用されたことを鮮明に記憶している。しかしながら、授業の中心は映画とは無関係のエッセイの訳読であり、最後の15分間のみ映画を視聴するという形式であった。映画の活用法に関しては、まだまだ手探りの状況であったと言えよう。

ビデオソフトがまだ充実していなかった当時は、前述の日比野(1983)のように、二ヶ国語放送された映画やテレビドラマをビデオに録画して授業を行うことが多かったようだ。また、特にテレビドラマのシナリオは一般に入手困難であるため、教材作成にはかなりの労力と時間がかかったようである。

3. 1980年代後半

80年代も後半になってくると、ビデオデッキはかなり普及し、また、レンタルビデオ店なども一般的になってきた。また、当初1万円以上していたビデオソフトも3千円前後の低価格で発売されるようになり、映画ビデオは手軽に利用できるメディアとなってきた。当初音楽ソフトが主流であったレーザーディスクでも映画ソフトが多数発売されるようになっていった。それに伴い、授業での実践も確実に増えていった。

まず、飯田(1987)は、映画『卒業』、『黄昏』(*On Golden Pond*)、『ダイヤルMを廻せ』、『十二人の怒れる男』(*12 Angry Men*)を活用した高等学校での実践報告である。ここでは、当時日本では映画のシナリオを入手することが困難であることから、シナリオの入手方法としてアメリカの映画台本専門の配給会社の活用を勧めている。しかし、費用がかなりかかることを考慮すると、むしろアメリカ人の「家庭教師」を雇い、独力でシナリオをおこす方が良いとも述べており、実際、報告されている実践の教材も自らがシナリオをおこしたもののようである。飯田は、「教育実践する場合自らシナリオをおこして事前に素材をすみずみまで完全に自分のものにしていく方が有利」(p.287)と述べているが、教材作成には非常に多くの労力と手間が必要であったと思われる。

次に、1988年には、雑誌『新英語教育』の10月号にて、初めて映画を活用した授業について特集(「特集／ビデオを使って豊かな授業を」)が組まれている。同じビデオというメディアではあっても、いわゆる教育用ビデオソフトについては、80年代半ばから紹介記事やレビューなどが定期的に掲載されるようになっていたが、映画に関してはこれが初めてである

うと思われる。

この特集で取り上げられた山本(1988)は、『サウンド・オブ・ミュージック』(*The Sound of Music*)を活用した大学(1987年)および専門学校(1988年)での実践報告である。ここでは、ストーリーをリライトしたテキスト(*The Sound of Music*、三友社)の章立て(全12章)に沿った形でビデオを鑑賞しながら、テキストの読解、聞き取り演習、表現活動(パフォーマンス)といった演習を行ったことが報告されている。山本は、映画を活用した授業において特に重視すべき点として、次のような異文化理解の側面を挙げている。

- ①異文化理解の観点から文化的説明を加える。
- ②反ファシズム、ナチス台頭、第2次世界大戦など時代背景を説明する。
- ③言語外言語(non-verbal language)の読み取りを重視する。

これまでの実践報告では、台詞の理解といった言語的側面に重点が置かれていたが、異文化理解に焦点を当てたものとしては初期のものと言えよう。山本には、他にも、日英比較の観点から、英文・字幕・逐語訳の相違に気づかせるといった活用法も報告されている。

山本は、ここ数年にわたって映画を活用した授業を行ってきたとし、他に使用したものとして次のような映画を挙げている。

『アンネの日記』(*The Diary of Anne Frank*)、『サウンド・オブ・ミュージック』、『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*)、『ハムレット』(*Hamlet*)、『嵐が丘』(*Wuthering Heights*)、『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*)、『誰がために鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*)、『怒りの葡萄』(*The Grapes of Wrath*)、『風と共に去りぬ』(*Gone with the Wind*)

土屋(1988)と東(1988)も、同じく『サウンド・オブ・ミュージック』を活用した実践報告であるが、これらは高等学校における実践である。『サウンド・オブ・ミュージック』は約3時間の長編作品であるが、これまで述

べた三つの実践報告では、いずれも映画は授業において全編視聴させているようである。

特に、東は、いわゆる動機付けのために映画を活用したという例である。英語が不得意な学生や学習意欲のない学生に対して、動機付けの効果を重視して映画を活用するということはよく言われるが、映画を活用する主たる理由として動機付けを挙げるようになったのは、この時期あたりからであろう。動機付けを主眼に置いたものとしては、他にも、大学生を対象とした松山(1989)などもある。

古坂(1988)も、同じく主として動機付けのために映画を活用したという高等学校での実践例である。英字新聞に掲載されたシナリオ抜粋をもとにしなが、『ネバーエンディング・ストーリー』(*The Neverending Story*)を教材として使っている。古坂には、5年前から実践を始めたとあり、他の実践報告とも考え合わせると、どうやら1980年代前半に映画を活用した様々な実践が始まったと考えてよさそうである。理由としては、ビデオデッキの普及によりテレビの二ヶ国語放送をビデオに録画して、教室で学生に視聴させるということが比較的簡単に行えるようになってきたなど、ハードの環境が整備されてきたことが大きな要因であろう。

他にも、『ライムライト』(*Limelight*)を使った高校での実践例の浮田(1988)や『風が吹くとき』(*When the Wind Blows*)を使った大学での実践例である安藤(1988)などがある。安藤は、平和教材としての観点から『風が吹くとき』を選び、原作(Penguin Books)とビデオを活用しながら行った授業実践であるが、ここでは日本語吹き替え版ビデオが使われており、ビデオは言語理解よりは原作理解の補助として使われている。

大学での実践としては、他にも聴解力養成と主眼とした服部(1988)、Someya(1989)およびEdasawa et al.(1989)がある。

服部は、『卒業』を使った実践であるが、映画を活用したりスニング演習は従来の訳読式の授業と比較して学生の動機付けに大きな効果があったことを報告している。ただし、週1回の授業では聴解力の目立った上昇は見られなかったようである。

Someyaも、動機付けの面から映画活用の有効性を説いたもので、『ロッキー』(Rocky)などを活用したりスニング指導の実践である。映画の活用方法としては、映画全編よりは一場面のみの活用を勧めている。また、Someyaは、いわゆる名作が必ずしも教材として効果的とは限らないとして、教材選択の重要性を述べている。例として、名作として名高い映画『ベンハー』(Ben-Hur)を授業で使用したが、学生は全く関心を示さなかったことを挙げている。この作品は、教員を対象としたアンケート調査では授業で使用するべき映画として多くの支持を得たにもかかわらず、学生を対象とした同じ調査ではほとんど支持されなかったという結果も報告されている。学習者のニーズ調査の重要性を指摘したものと言えよう。

これまでの実践報告は、いずれも実験結果など実証を伴うものではない。新しく利用可能となった映画というメディアを実際の授業でどのように活用できるのか、とにかく実践してみようといった状況であろう。Edasawa et al. が唯一例外と言えるもので、大学生を被験者とした3ヶ月にわたる実験の結果を報告している。授業では毎回『ある愛の詩』(Love Story)を約10分程度視聴させ、部分ディクテーションを演習として課している。実験結果では聴解力に目立った上昇は見られなかったものの、動機付けには非常に効果的だったとしている。他にも、この研究は、映画活用における利点と問題点を的確に指摘しているものとして評価できる。他の多くの研究でも、この点については多少なりとも触れているが、Edasawa et al. はそれを次のように分類している。

映画使用の利点

- ① 現実に近い場면을教室内に再現できる。
- ② 学習者の動機付けに効果がある。
- ③ 音声だけでなく、映像により多くの情報を与えることができる。
- ④ 非言語コミュニケーションの要素を効果的に指導できる。
- ⑤ ナチュラル・スピードで話される authentic な英語に触れさせることが可能である。

映画使用の問題点

- ①学習ではなく、娯楽に流れてしまいやすい。
- ②ナチュラル・スピードで話される映画の英語は、上級者を除いては難し過ぎる。
- ③通常2時間近くある映画は、1回の授業では扱えない。

上記の聴解力養成を主眼とした実践では、いずれも目立った効果は報告されていない。しかし、これは映画の活用を否定するものではなく、指導方法や教材選択の面における研究の必要性を指摘するものと言えよう。また、教材に関しては、教員の自作プリントの他、映画化された文学作品の原作やそのリライト版が使用されることが多かったが、この時期1987年には、開文社出版より、映画を扱った大学用英語教材として、『Hollywood Skyway to English (映画と英語とアメリカと)』が発売されている。これは、『ティファニーで朝食を』(*Breakfast at Tiffany's*)など、12の作品のシナリオを素材とした総合教材で、これ以後シナリオを主体とした様々な英語教科書が登場してくる。

1980年代後半には、ビデオデッキ、ビデオソフトの普及以外にももう一つ、映画をはじめとするビデオの活用に変化がもたらされることになる。それは、クローズド・キャプション (Closed Caption、以下CCとする) と呼ばれる英語字幕が日本でも利用可能となってきたことである。CCは、もともと難聴者向けの字幕サービスとして1980年にアメリカで実用化されたものだが、CCデコーダーをビデオデッキに接続することにより、ビデオを英語字幕付きで視聴することが可能となった(注1)。CCデコーダーは、1987年にフューテック (Futek) から国産初となるFA700が発売されている(関谷、1995: 163)。CCデコーダーの発売にあわせてCC信号入りの英語教育用ビデオはいくつか発売されたが、映画に関しては、当時日本で発売されるビデオソフトにはCC信号が入っていなかったため、CC入りでビデオを見るためには、輸入版のビデオソフトを使用するしかなく、ソフトの数は非常に限られていた。また、もともと外国語学習用ではなく、難聴者向けの字幕サービスであるため、早口の部分では省略

されたり、言い換えられたりする箇所もあり、発話と100%正確な字幕とは言えない点を問題点として挙げる声もあった。

CCのそうした状況を反映してか、1989年には、ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメントからシネックス (CINEX) シリーズというオープン・キャプション方式の英語字幕つき映画ビデオが発売されている。オープン・キャプションとは、CCのようにデコーダーを使用することにより字幕が見えるようになるのではなく、画面に焼付けた字幕である。このシリーズは、通常の日本語字幕の代わりに英語字幕を焼き付けた洋画ビデオで、語法解説を載せたCINEXガイドが付属しており、『ゴースト・バスターズ』(*Ghostbusters*) や『スタンド・バイ・ミー』(*Stand by Me*) など、約30タイトルが発売されている。これは前述のCCと違い、ビデオデッキさえあれば、デコーダーなしでも見る事が出来るという特徴の他、100%正確な字幕が小文字入りで提示されるものである(注2)。当初個人学習用で発売されていたのだが、後にはスクール・カリキュラムと呼ばれる学校での活用を念頭に置いたプログラムも発売されている。これには、学生用ワークシートや教師用指導書などがセットされている(池田、1995:177)。このように、CCの登場をきっかけとして80年代後半からは英語字幕を使った映画ビデオが登場してきた。

Kikuchi (1997) によれば、このCCは、大学では1985年あたりから輸入版ビデオを使って授業実践が行われていたようである。前述のように、国産のCCデコーダーは1987年に発売開始となったが、米国で発売されたデコーダーを利用することにより、1985年当時でもCCを使って授業することは可能であったようだ。また、Kikuchiは、語学ラボラトリー学会(LLA)第28回全国大会で「映画のClosed Captionを応用した英語視聴覚教育」として発表された菱田(1988)が日本におけるCC研究の先駆であるとし、1988年を日本におけるCC研究の始まりと位置づけている。確かに、1988年より、CCの他、英語字幕やキャプションといった名前で様々な研究や実践が報告されるようになってきた。

まず、木村(1988)は、『トップガン』(*Top Gun*)を用いた実践が学生の動機付けに効果が大きかったとしている。続く木村(1989)は『アンタッ

チャブル』(*The Untouchables*) を活用した大学における実践であるが、CCが学生の聴解力と読解力とのギャップを埋めるのに役立つとしている。

鈴木(1989)は、『愛は静けさの中に』(*Children of a Lesser God*) を活用した実践報告である。他にも、菱田(1989)、山本(1989)などが、数少ない80年代におけるCC付きビデオを活用した実践報告である。この後90年代以降になると、CCを活用した映画使用に関する研究は、映画英語教育研究の一つの柱となってゆく。

CCという英語字幕の登場により、映画は今まで以上に多くの教員、研究者から注目されるようになったと言える。確かに、前述の服部(1988)、Someya(1989)、Edasawa et al.(1989)など、動機付けには大きな効果が得られたものの、聴解力養成を主眼とした実践では必ずしも期待された効果は報告されておらず、映画の英語はそのままではやはり学生には難し過ぎるという意見があったことも事実である。菱田(1989)が指摘するように、CCにより“authentic”ではあるが、聞き取りが難し過ぎた映画を教材として取り上げる道が開けたのである。

それまで、映画使用の利点としては、音声だけでなく映像があることにより、実際の言語使用の状況や非言語コミュニケーション要素を学ぶことが出来るという点が主に指摘されていたが、これにCCが加わることにより、映画は映像・音声・文字という3つの情報チャンネルから学ぶことが出来るメディアとして注目されるようになってきた。これにより、情報チャンネルの多重化が語学学習にプラスに働くか否かという視点からも研究が進められてゆくことになる。

4. おわりに

本稿では、映画英語教育における1980年代の流れを概観してきたが、その結果、80年代前半からいわゆる映画英語教育の実践、または模索が始まったと言えるであろう。これには、ハード・ソフト両面の整備が大きく進んできたことが大きい。また、authenticな英語に対する関心が高まってきたことも、映画に教員の関心が向いた一つの要因であろう。80年代も後半になってくると、映画は映像つきのauthenticなリスニング教材として活用されることも増えてきたが、動機付けには大きな効果があったものの、聴解力向上における効果は十分確認されてはいない。映画の英語は、authenticではあるが、「学生には難しすぎる」と捉えられることも多かった。そのような状況で注目され始めたのがCCであり、CCを活用した様々な実践が始まったのも80年代の大きな出来事と言えるであろう。実証実験も始まったが、80年代はまだ授業実践の時代と位置づけられるのではないだろうか。本格的な研究の開始は90年代を待つことになるが、90年代以降の流れについては、また次の機会に報告をしたい。

■ 注

1. CCの詳細については、Kadoyama (1999) を参照。
2. CCはすべて大文字表示である。当時大文字表示のCCは読みにくいとする日本人学習者も多かった。

■ 参考文献

- Edasawa, Y., Takeuchi, O. & Nishizaki, K. (1989) "Use of Films in Listening Comprehension Practice." *Language Laboratory* (26), 19-40
- Kadoyama, T. (1999) *Closed Captions for Language Teaching and Learning*. Hiroshima: Keisuisha
- Kikuchi, T. (1997) "A Review of Research on the Educational Use of English Captioned Materials in Japan." *Numazu College of Technology Research Annual* (32), 147-160
- Someya, M. (1989) "On the Use of English Movies as Effective Teaching Material." *Language Laboratory* (26), 78-86
- 安藤勝夫 (1988)「When the Wind Blows を平和教材の武器に『風が吹くとき』の教材化とアニメの活用」『新英語教育』第229号, 21-23
- 飯田亮三 (1987)「教材としての映画」『新英語教育講座－その理論・実践・技術－第13巻 音声指導と視聴覚機器』三友社, 286-291
- 池田裕計 (1995)「映画英語教育とCINEX」スクリーンプレイ出版編集部 (編)『映画英語教育のすすめ』スクリーンプレイ出版, 175-179
- 浮田恭子 (1988)「ライムライトの実践から ビデオを使った授業」『新英語教育』第229号, 18-20
- 角山照彦 (2004)「日本における映画英語教育の流れ①－1980年代以前の流れ－」『映画英語教育』第9号, 17-32
- 木村博是 (1988)「英語字幕 "Top Gun" を使った授業」『視聴覚教室通信』第10号, 近畿大学教養学部視聴覚教室, 24-34
- 木村博是 (1989)「英語字幕映画 "The Untouchables" を活用して」『視聴覚教室通信』第10号, 近畿大学教養学部視聴覚教室, 11-23
- 古坂博一 (1988)「ビデオを使って授業を楽しく」『新英語教育』第229号, 12-14
- 鈴木典子 (1989)「キャプションビデオを利用してみて－Children of a Lesser God の場合」『LLA第29回全国大会要綱』, 41-42
- 関谷早苗 (1995)「映画英語教育とCC」スクリーンプレイ出版編集部 (編)『映画英語教育のすすめ』スクリーンプレイ出版, 163-166
- 高山一郎 (1986)「英語の授業における映画・テレビドラマの活用」『言語文化センター紀要』第6号, 東京大学教養学部附属言語文化センター
- 土屋登 (1988)「The Sound of Music のビデオを使って」『新英語教育』第229号, 24
- 長谷川潔 (1981)「教材としての映画の利用－イプセンのA Doll's House による英語指導－」『英語教育』第30巻第3号, 9-11
- 服部良輔 (1988)「映画『卒業』を使った授業－リスニングを中心として」『JACET第27回全国大会要綱』

- 東隆治 (1988)「ビデオは楽しかったが…」『新英語教育』第229号, 9-11
- 菱田一三 (1988)「映画のClosed Captionを応用した英語視聴覚教育」『LLA全国大会要綱』
- 菱田一三 (1989)「英語字幕付映像メディアの英語教育における効用」『中部地区英語教育学会紀要』第19号, 93-98
- 日比野日出男 (1983)「LLにおける Authentic English活用の試みーバイリンガル映画とコマーシャルの場合ー」『金蘭短期大学研究誌』第14号, 69-95
- 松山正男 (1989)「ビデオ映画を教材に」『英語教育』第38巻第6号, 76-78
- 山本証 (1988)「ビデオの本格的な活用「サウンド・オブ・ミュージック」の総合実践」『新英語教育』第229号, 6-8
- 山本証 (1989)「AV教材としての映画ーClosed Captionを活用して」『JACET第28回全国大会要綱』, 87-88

■ Abstract

The History of Teaching English through Films Part 2
—focusing on the 1980s—

Teruhiko Kadoyama

This paper is the second part of an attempt to review the history of teaching English through films in Japan. The main objective of this historical study is to reveal how commercial films have been utilized in the teaching of English in Japan. It also aims to reveal the present state and possible challenges in using films in the classroom.

This paper focuses on the 1980s when the use of films started in the classroom in Japan. It was found that increasing awareness and interest in authentic materials among language teachers led to films being explored in the classroom in the first half of the 1980s. Improvement of the environment for using films greatly facilitated the classroom use in the second half of the 1980s.

The advent of closed captions, toward the end of the decade, helped lead researchers to examine the effectiveness of films from various standpoints. Most of the studies, however, were still experimental. This paper concludes that, in general, the 1980s marked the period of classroom use, followed by actual and full-fledged research in the 1990s.